

信州・善光寺寄進

染付花唐草文大燈籠の銘文について

On the inscription on a pair of large ceramic lanterns with flower and vine design, underglaze cobalt-blue, donated to Zenkoji temple, Shinshu.

仲野 泰裕

Yasuhiro Nakano

概要

信州善光寺（長野県長野市）に寄進された『染付花唐草文大燈籠』一对は、他の石製燈籠などと共に、本堂正面両脇に竹垣で結界、植栽された地区に安置されている。本堂正面に向かう、参道石畳の最奥部に位置する大香炉より、やや本堂寄りの露座ではあるが、この大燈籠には、金属製の上屋が架けられている。参拝者の衆目を集める位置（図1）でもあり、その存在は早くから知られ、写真等^(註1)で紹介される機会は多くあった。しかし、歴史史料としての紹介はされていないため、銘文を中心に以下に紹介することにより、当時の窯業生産と流通の一端を示すものである。

1 染付花唐草文大燈籠 一对

この大燈籠は、石燈籠の分類に沿えば白太夫型に近い形状であり、上部から宝珠、請花、笠、火袋、中台、竿、基礎などの部位に分かれる^(註2)。笠部の軒先は蕨手状に丸くなるのが一般的であるが、当該資料では、軒先ごとに白磁の玉を前肢で支え後肢を蹴り上げるような肢体の唐獅子が配置されている。尾も高く巻き上げられ躍動的である。全体に呉須が流し掛けられており、巻き毛が白く浮かび上がっている。火袋部分の三方に、仏教寺院の記号であり、功德・円満の意を表すとされる「卍」の透かしによる火窓が設けられている。現在は、燈籠を風雪から守るため、金属製の上屋と側面は網で囲まれているので、全長等の計測はできないが、過去の計測例では、高さ175cmと記録^(註3)されている。全体に、同心円状の形状であるが、笠部やそれぞれの部位に施された窓絵は、六面構成が基本となっている。文様、銘文は、すべて呉須を用いた下絵付である。全体の地文は、牡丹唐草文などであるが、窓絵が設けられており、宝尽くし、雲龍、花・虫文などが描かれている。さらに請花部、笠部の正面と裏正面、火袋部の火窓枠などに、善光寺の寺紋である三葉の立葵が描かれている。染付文様は、倉辰辰次郎による絵付と伝えられる^(註4)。本体竿部裏面には「東春日井郡 瀬戸町 寄附人 加藤左衛門 明治貳拾七年（1894）」他の銘が認められる。さらに基

壇部には6枚の磁製陶板が固定されており、加藤左衛門を始めとして26件の寄進者名がある。

2 紀年銘

信州善光寺に寄進された『染付花唐草文大燈籠』一对に伴う紀年銘は、燈籠本体と、これをのせる基壇部に固定された6枚の磁製陶板に、呉須を用いて下絵付されたものである。

(1) 燈籠本体紀年銘

燈籠の主体部を支える竿部には、「節」と呼ばれる帯が数本入るのが一般的である。白太夫型や水屋型では、中央に太い帯が1本設けられているが、さらにこれを誇張気味に発展させて、中蕪状に成形されている。竿部の正面全面を用いて、二重の輪郭線を用いた白抜き文字で「常夜燈」と大きく表示されている。竿部の裏正面の下部に窓状の、無文部分を作り「愛知縣 東春日井郡 瀬戸町 寄附人 加藤左衛門 明治貳拾七年 午初春」^(註5)と染付されている。

(2) 基壇部磁製陶板紀年銘

燈籠本体の火袋の卍火窓及び竿部の白抜き「常夜燈」とある部分を正面として、その真下にある陶板をA面とする。さらに発願者の記述位置、陶板の余白などを勘案して、A面の正反対（裏正面）の陶板をB面とし、A面から左へ1面、2面、同様にA面から右へ3面、4面と仮に番号等を付けて本稿においては記述を進める。この六枚の陶板には、「寄附製造人 加藤左衛門」を始めとして、住所、職業、氏名（社名）の順に縦書きで26件の寄附奉納人が記されている。なお「寄附奉納人」「發願寄附奉納人」の文字以外はすべて縦書きであるが、誌面の都合により横書きで記載した。文字はできるだけ原文に沿って旧字を用いたが、区については、旧字のほか、略字もあるため区に統一した。また「蛸壳町」は現地名から推定して「蛸殻町」の略字と考えられる。

A面（図2）

寄附奉納人

愛知縣尾張國東春日井郡

瀬戸町夜燈寄附製造人

加藤左衛門

東京市京橋区南新堀一丁目

二番地陶器商満留壽商會

加藤助三郎

愛知縣尾張國東春日井郡

明知村陶器卸商

鵜飼源八

當國上伊那郡朝日村赤羽区

製絲器械鍋製造人

有賀文藏

神奈川縣相模國藤澤驛

陶器卸商
宮崎松治

B面 (図3)

明治廿七年四月

預り別當

大勸進

取次

良性院住職

彦坂海亮

1面

寄附奉納人

東京日本橋区箱崎町一丁目

一番地陶器問屋

岩田昇七

東京日本橋区蛸壳町

一丁目陶器問屋

瀧澤政吉

新潟縣中頸城郡関川村當時

當所長野石堂町陶器商

新井義一郎

當所長野上後町陶器商

上原松三郎

當所長野大門町陶器商

小松治三郎

當所長櫻枝町陶器商

柴田儀兵衛

當所長野上後町

陶器兼茶商

西川六兵衛

2面 (図4)

寄附奉納人

當國松代町陶器商

林源吉

當國上田町陶器商

木村義哉

岐阜縣土岐郡一ノ倉村

陶器焼附師

水野中竹

同

發願寄附奉納人

當所長野大門町

陶器商

瀧澤嘉助

當國更級郡稻荷山町

陶器商

保柳才兵衛

全所稻荷山町陶器卸商

周旋人

志村牧藏

3面

寄附奉納人

東京日本橋区箱崎町一丁目

二番地陶磁器問屋

大盛合資會社

東京日本橋区室町二丁目

二番地陶器問屋

古田鉄三郎

東京市京橋区蛸壳町

一丁目三番地陶器商會

濃榮合名會社

東京市日本橋区濱町三丁目

一番地陶器問屋

陶業株式會社

東京市京橋区壺岸島町

六番地陶器問屋

清水武兵衛

東京市京橋区壺岸島

四日市町一番地陶器問屋

大野宇八郎

4面

寄附奉納人

東京市京橋区南新堀

一丁目二番地陶器問屋

高橋藤右エ門

東京日本橋区濱町三丁目

一番地陶器問屋

加藤石松

(以下余白: 3面と同じ配分とすれば、4件分の余白となる。)

※記述傾向

A面、「夜燈」とあるのは、「常」の脱字であろうか。記述された表記のなかで「東京」と「東京市」がある。「長野」については、「野」の脱字が認められる。さらに「愛知縣」には「尾張國」、「神奈川縣」には「相模國」が付記され、「長野」については「當所」、長野県下の他所については「當國」とあり、この寄進の主体性を窺うことができる。また「陶器」と「陶磁器」の記述があるが、後者は1件であり当時は「陶器」が一般的呼称であったようである。

3 在銘者について

(1) 発願者

「發願者寄附奉納人」として、信州善光寺の門前町を形成する大門町（長野県長野市）の瀧澤嘉助、更級郡稲荷山町（同千曲市）保柳才兵衛、同志村牧藏の名前が、他よりやや大きく記述されており、前二者は陶器商とある。志村牧藏は、陶器卸商で別途「周旋人」と記述がある。志村がこの三人のなかでも中心となって取り持ち役として寄進計画を進めたものと考えられる。

(2) 職業

・生産活動に直接関係する人物

加藤左衛門「尾張國東春日井郡 瀬戸町夜燈寄附製造人」^(註6)とある。加藤左衛門家は、瀬戸市の北新谷地区^(註7)で陶磁器の生産を行った瀬戸有数の窯屋の一つで、代々左衛門を襲名している。二代が磁器生産に転じており、大物づくりで知られている。当該資料は後に述べるように三代左衛門（1857-1934）の作と考えられる。

有賀文藏「當國上伊那郡朝日村赤羽区 製絲器機鍋製造人」とある。赤羽焼（長野県上伊那郡辰野町赤羽）は、元治2年（1865）創業とされるが、その後曲折を経て慶応3年（1867）に有賀（あるが）祐右衛門らにより西釜が開かれ、蚕糸の繰糸鍋生産へと移り、低廉・堅牢なことで全国的に需要が高まり大正中期頃まで好景気を招いており、文藏の名も認められる^(註8)。

水野中竹「岐阜縣土岐郡一ノ倉村 陶器焼付師」とある。現在の岐阜県多治見市市之倉町にあたるが、確認されていない。しかし市之倉には、株式会社明洋社が設立（設立については、明治25年説と同15年説がある。^{註9}）され、横浜に支店が設けられるなど積極的に輸出陶磁器生産に取り組んでおり、関連資料の調査が待たれる。

・陶器商、等

陶器商、同問屋、同卸商など、上記3件を除く23件である。東京在住者は、満留壽商会（加藤助三郎、1857-1908）、濃榮合名會社を除くすべてが問屋を名乗っており、長野を含む他地域は、長野県稲荷山町の志村牧藏、愛知県明知村鶴飼源八、神奈川県宮崎松治は卸商と称し、他は陶器商となっている。陶器商を小売り販売者とする、各地区の卸商・問屋を経て陶器商へ流通すると思われる。ただ東京では、陶器商会と陶器商が各1件ある他は陶器問屋となっており、地域性は認められるが、卸商と問屋との区分については判然としない。

(3) 「取次 良性院」

信州・善光寺には、天台宗の大勸進（貫首大僧正）と浄土

宗の大本願（尼公上人）の二大寺があり、法要などの日常の行事を交代で勤め、二つの宗派によって管理・運営されている。大勸進の下には二五院、大本願の下には十四坊がある。良性院（りょうしょういん）は、大勸進に属しており、陶板の記述から、今回の寄進の窓口となったことがわかる。

4 加藤左衛門作の燈籠の類例について

瀬戸・加藤左衛門作の燈籠は現在4例が知られている^(註10)。

① 釉下彩花唐草文大燈籠

明治11年（1878）頃の作で、パリ万国博覧会に出品されたと伝えられる。「日本瀬戸 加藤左衛門製」染付銘。宝珠欠失の他は、保存状況良好である。三面の火窓には、それぞれ円窓、三日月、鹿の透かしが認められる。「常夜灯」の表記は無い。文様は呉須、クローム、正円子が用いられている。現存高191.0cm（瀬戸市指定文化財、瀬戸市蔵）

② 染付花唐草文大燈籠

一对 秋葉総本殿可睡斎（静岡県袋井市久能）寄進。

「寄附愛知縣 管轄 尾張國 春日井 郡」「瀬戸村中」「磁器焼職 加藤左衛門 製造」染付銘。協賛した個人名は認められない。残存高114.5cm。濃尾地震（明治24年・1891）による倒壊により、宝珠、請花、火袋と傘の一部を欠失している。傘部にクロームによる緑色の釉下彩が認められる。また瀬戸の陶業者は、「火之迦具土（ひのかぐつち）」神を祀る秋葉山を信仰していることに由来するもので、火に対する感謝と畏敬の念からの寄進と考えられる。

③ 染付花唐草文大燈籠

19世紀後期 「日本瀬戸 加藤左衛門製」染付銘。

請花部欠失の他は保存状況良好である。三面の火窓には、それぞれ円窓、三日月、蝙蝠の透かしが認められる。「常夜灯」の表記は無い。残存高176.0cm。（個人蔵）

④ 染付花唐草文大燈籠

一对 信州善光寺寄進

いずれも、制作者は、瀬戸・加藤左衛門であり、代々、大物造りで知られると共に、多くの窯屋をまとめる人望のある家柄であった。④には「東春日井郡」②には「春日井郡」とある。春日井郡が東西に分かれるのは明治13年（1880）であり、②はそれ以前の制作となる。さらに同17年（1884）に、二代左衛門（1831-1900）が隠退し、三代左衛門（1857-1934）が家業を継承している。これにより、④の信州善光寺寄進例は三代左衛門作、②の秋葉総本殿可睡斎寄進例は二代左衛門作となる。

まとめにかえて

発願者の善光寺門前町を含めた陶器商・問屋など長野県が10件あり、東京の問屋等との数がほぼ拮抗していることから、両地区の強い絆で今回の寄進が成立したものと考えられ

る。東京と長野は、中山道板橋宿から北上し、信濃追分から北国街道に入り、上田を経て矢代宿（屋代、長野県千曲市）、丹波島（同長野市）を経て善光寺に至るといふ、現在の国道18号線にほぼ重なる流通ラインが浮かび上がってくる。一方、長野と生産地瀬戸は、北国街道篠ノ井追分（同長野市）から北国西街道に入り、稲荷山（同千曲市）を経由、松本（同松本市）を経て中山道に合流するルートである。さらに、氾濫時の犀川を迂回するため、稲荷山から松代（同長野市）を経由して、千曲川東岸沿いに北上して飯山（同飯山市）に至る谷街道（松代道）が知られている。稲荷山は、北国西街道最大の宿場町であり、明治時代には、繭・生糸・絹織物などを扱う北信濃唯一の商業都市として発展していることから、当時の稲荷山の重要性が浮かび上がってくる。また、所在が当時の「當所長野石堂町」から「新瀉縣中頸城郡関川村」へ移った「陶器商 新井義一郎」の記述がある。「関川村」は、北国街道が信越国境を日本海側へ越えた最初の宿場であり、これも主要な流通経路の一端を示している。

信越本線が開通するのは、明治26年（1893）4月であり、信越線篠ノ井から松本を経て塩尻に至る篠ノ井線が全通するのは、同35年12月である。中央本線はさらに遅れて、東西が全線開通するのは明治44年5月である^{（註11）}。それ以前の流通ネットワークといえるであろう。

また、名古屋城下から中山道に出るための脇街道として、下街道が知られているが、明知村（陶器卸商鶴飼源八、愛知県春日井市）は、その街道沿いに立地しており、明知村・西尾村・外之原村などには、明治期の磁器窯の存在^{（註12）}が知られており、掲載順位の高さを裏付けている。さらに、明知村よりさらに美濃國境に近い内津村を中心とした下街道沿いの地域は、江戸時代後期よりお茶の名産地^{（註13）}として知られている。地元には「文化十五年戊寅^{（註14）}四月□ 茶用松青堂 内津 鶴飼源六□」墨書の木箱や、「内津産玉露製 梅咲山」の貼り紙のある常滑茶壺などが伝世^{（註15）}している。「梅咲山」は、『尾張名所図会 後編』（明治13年・1880）に、「九条家の御銘」とあり、江戸時代後期からの下街道沿いの盛況をものがたっている。満留壽商會加藤助三郎は、東京市京橋区の陶器商として記述されているが、本拠は多治見に置いており、明治27年（1894）1月より『陶器商報』を毎月発行している。この『陶器商報』第百五号には、「大日本陶業百傑人名」^{（註16）}が掲載されており、この燈籠の関係者では「加藤助三郎」「加藤左衛門」「大盛合資會社（社長前田梅三郎）」が認められる。また、加藤助三郎の『履歷書』（明治40年・1907、^{註17）}の「献納」の部には「明治二十七年三月 信濃國善光寺へ尾州瀬戸焼磁製大燈籠壺對献納ニ就キ之ヲ賛同シテ金參拾圓献納ス」とあり、磁製大燈籠の制作時期、協賛額が記述されている。ただし、A面記載者は、2面後半にある発願人の記載文字とほぼ同じ大きさであり他の協賛者より扱いが大きいことから、協賛額には差があったものと考えられる。あわ

せて加藤助三郎の「金參拾圓献納」が明治27年3月、燈籠竿部にある制作者加藤左衛門の銘に同年「初春」とある。さらに、基壇部に設置された陶板には「四月」と記述されており、資金調達、制作、輸送・設置までに大きな時間差は認められない。

また、中山道からそれて伊那谷に入る赤羽の有賀文蔵がA面に記載されている。岡谷を中心とする長野県における蚕糸（さんし）業の盛況と、それに付随する繰糸鍋などの生産により活気があった当時の赤羽焼の状況をものがたっている。

東京では、日本橋区6件、京橋区4件、「陶器問屋」の記載がある。『江戸買物獨案内』（文政7年・1824）には、33件の陶器商の記載があるが、多くは「瀬戸物問屋」と称している。また『江戸名所図会 卷之一』（天保3年・1832）では、「今川橋」「此辺瀬戸物屋多し」と説明されており、「瀬戸物町」が形成されていたことがわかる。江戸時代の記述は屋号の記載であるため、近代の陶器商との照合は容易ではないが、箱崎や南新堀、壺岸島など共通する地名も認められる一方で、蛸殻町など海岸沿いに進出する傾向も認められる。

以上が、信州善光寺寄進 染付花唐草文大燈籠一対の特徴、紀年銘及び関連事項の概要である。本稿の執筆にあたり、銘文中の難読文字については山下峰司氏、加藤助三郎の『履歷書』については高木典利氏からご教示を得た他、下記の方々からも多くのご教示を得たので、記して御礼申し上げるものである。

赤羽義洋、岩井理、村中浩彦。

写真掲載については善光寺事務局のご承認を得た。

註

註1 加藤庄三『民吉街道』東峰書房 1982。『加藤左衛門』瀬戸蔵ミュージアム 2009。

註2 燈籠の部分名称は、上から宝珠、請花、笠、火袋、中台、竿、基礎、基壇が一般的である。『大日本百科事典』小学館1968。『国史大辞典』吉川弘文館1979。『日本歴史大辞典』河出書房新社1985。『広辞苑』岩波書店1998。上原敬二『ガーデニングシリーズ石燈籠・泥塔』加島書店。

註3、4 加藤庄三『民吉街道』東峰書房 1982。

註5 明治27年（1894）は「甲午」であり干支と合致する。

註6 瀬戸村（尾張藩領、水野代官所支配）が、明治25年（1892）町制施行。大正14年（1925）赤津村など合併。昭和4年（1929）市制施行。同26年（1951）以降、水野村、幡山村、品野町などを合併。

註7 北新谷（きたしんがい）。一般に、瀬戸川の北側地区を指し、染付磁器の生産により急速に発展した地区。

註8 辰野美術館赤羽義洋氏ご教示。

註9 『多治見市史 通史編下』多治見市 19787。

- 註10 『企画展 加藤奎左衛門』瀬戸蔵ミュージアム 2009。この展覧会を担当された岩井理氏によれば、③にあげた燈籠は、元々一対であったが、破損のため1点のみ展示した。さらに未確認資料が一件あるとご教示いただいた。
- 註11 大久保邦彦・他「鉄道輸送年表」『旅 864』1999。
- 註12 仲野泰裕「窯株の崩壊と新窯 瀬戸周辺地域を中心として」『近代陶磁3』近代国際陶磁研究会 2002
- 註13 仲野泰裕「忘れられた茶所 尾州春日井郡内津村」『教育愛知 49-5』愛知県教育委員会 2001
- 註14 文化15年4月22日改元・文政元年・1818。
- 註15 2002年5月、村中治彦氏・他と共に現地調査。
- 註16 高木典利「近代陶磁を彩った人々」『近代陶磁1』近代国際陶磁研究会 2000。『陶器商報』百号を記念して募集したもの。
- 註17 『履歴書 陶器商満留壽商會主 加藤助三郎』明治四十年三月下 罨紙に墨書 個人蔵。



图1 染付花唐草文大燈籠 現況 右手善光寺本堂拜殿

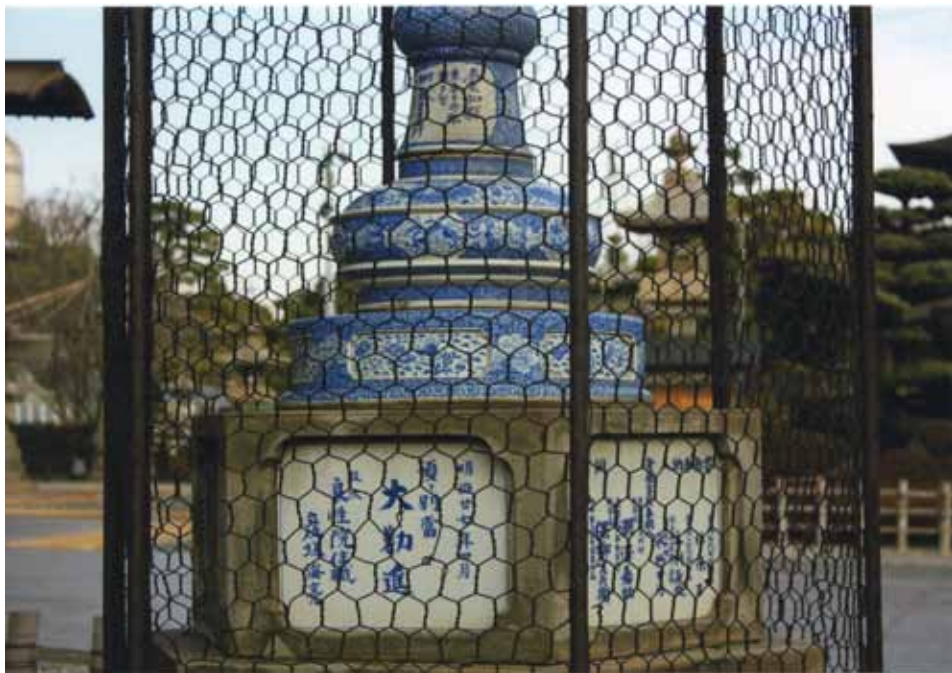


图2 本体在銘部 基壇部 陶板B面

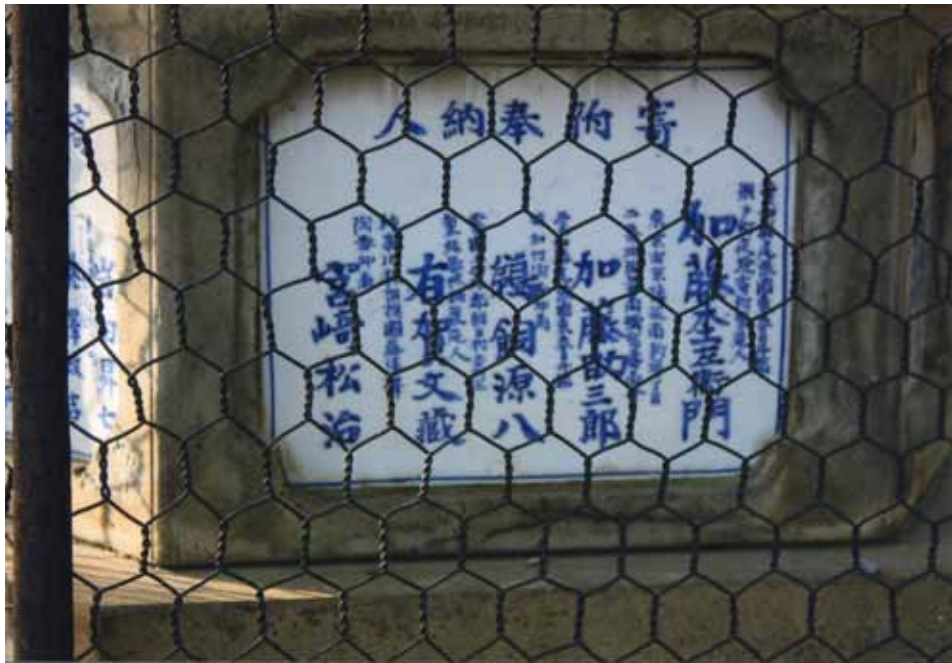


图3 基壇部 陶板A面



图4 基壇部 陶板2面